

# 引用表現 (be) like は副詞か？

## — 認知言語学的意味拡張の観点からの分析 —\*

貞 光 宮 城

キーワード：引用表現 (quotative)、be like、辞書、品詞、意味拡張、文法化

### 1. はじめに

引用表現 (quotative) としての be like がアメリカで確認されはじめて以来、<sup>1</sup>英語圏に急速に広まった。今や、sayに代表される伝達動詞 (quotation verb) の1つとして頻繁に使用され、機能している。<sup>2</sup>この用法は辞書にも記載され、たとえば、*Oxford Advanced Learner's Dictionary*では以下のように記述されている。

- (1) I'm, he's, she's, etc. *like* used in very informal speech, to mean 'I say', 'he/she says', etc.

And then I'm like 'No Way!' (OALD, sv. *like*, adv 3)

本稿で取り上げようとしているのは、その際のlikeの品詞である。<sup>3</sup>手近にある十数種の辞書を見ても、その分類はまちまちである。上の例(1)もそうであるが、多くの辞書において、この用法でのlikeは副詞と分類されおり、中には前置詞や形容詞として記載されているものもある。そこで、この点を認知言語学的観点から、とりわけ意味拡張の点から、この品詞をどう分類すべきか考察し、一定の方向性を提案する。

### 2. 辞書の記述とその問題点

まず、各辞書の記載事項を確認しよう。調査した13種の辞書において、引用表現 (be) likeは、前置詞、形容詞、副詞、そして接続詞と4種類に記載されている。この結果をまとめたのが以下の<表>である。また、各辞書の該当する部分の記載事項の抜粋は[別表]にまとめてある。

<表> 辞書での (be) likeの品詞分類<sup>4</sup>

| 品詞 | 前置詞  | 形容詞    | 副 詞                                       | 接続詞              |
|----|------|--------|---|------------------|
| 辞書 | WEJD | KEJDGR | CD, LDOCE, NOAD, OALD, ODOE, KNCEJD, PEJD | MWD, GEJD, RHEJD |

ここで、本稿で考えるべき問題点は、次の2つである。1点目は、いったいどの品詞分類が最も適切であるか。そして2点目は、なぜ辞書によってこのように品詞の分類にばらつきがあるのか、ということについてである。そのために、各品詞分類について、その問題点を指摘していこう。

1つ目は、当該のlikeを前置詞とする立場である。辞書には以下の(2)のように記載されており、その例文が(3)である。

- (2) 《非標準》 b. 『be ～; 直接話法』 …という; …って感じで (“say something approximately like …” の意で、表現しにくい出来事や感情、実際の音などを示す時に用いることが多い; 主に若者に好まれる)

- (3) Then he was like “You liar!” (WEJD, sv. *like*<sup>2</sup>, 前4.)

2つ目に、形容詞の中に分類する立場では、以下の(4)と記載され、その例として(5)が挙げられている。

- (4) be like…[発話を導入して] \*《口》(…と)言う, 言っている.

- (5) And he's like, “Shut up!” (KEJDGR, sv. *like*<sup>2</sup>, a, *be like*)

一見して、このlikeを前置詞や形容詞として分類することには問題があることは自明のように思われる。なぜなら、例文(3)も(5)もそれぞれ示すように、likeに続くのは句ではなく節である。前置詞や形容詞の伝統的な定義上、この分類は適切とは考えられない。これを特殊な例外として認める説得力のある根拠も提示されていない。ではなぜこうした分類がなされてしまうのであろうか。

次に、副詞として分類する立場の辞書を見てみよう。調査した辞書の中ではこの立場が多数派であったが、その一例として、KEJDGRには、(6)のように記載され、その例として(7a, b)が挙げられている。

- (6) 副詞《口・非標準的》1. [be 動詞のあとで; 人の言葉や感情表現を引用して]《米》 …と言う, 言うには…

- (7) a. And I was like, “No.”

- b. They were like, huh? (KEJDGR, sv. *like*<sup>2</sup>, a, *be like*)

調査した辞書では半数がこの立場であるが、これにも問題がある。たとえばQuirk, *et al.* (1985)の副詞的語句 (adverbial) の3つ分類のどれにも該当しない。<sup>5</sup> 副詞は本来修飾語句であるはずだが、この場合、何を修飾しているか特定できず、他の品詞 (文全体の場合を含む) を修飾する語句としてlikeは機能しているとは考えられない。

以上のことから、残された可能性としては接続詞ということになる。以下の節で、その妥当性について議論する。

### 3. 提案と議論

本稿で考えるべき問題点は、(i) いったいどの品詞分類が最も適切であるか。そして(ii) なぜ辞書によってこのように品詞の分類にばらつきがあるのか、ということであった。これらについて、前節までの考察を受け、引用表現の (be) like の品詞を接続詞と分類する立場で、認知言語学的な観点から以下で議論する。

#### 3. 1. (be) like の品詞

まず、問題点(i)については、本稿の提案は、引用表現の (be) like の品詞を接続詞として分類すべきというものである。その根拠としては、まず統語上、likeの後に引用文(節)を従えていることである。次の例を見てもらいたい。

- (8) a. She acted like she owned the place. (GEJD, sv. *like*<sup>2</sup>, 接2.)  
 b. It looks like it's going to rain. (PEJD, sv. *like*<sup>1</sup>, 接3.)

この辞書の分類・記述にもあるように、このlikeは明らかに接続詞である。これまで示してきた例(3), (5), (7)もすべてこれと同様の働きをしている。引用表現 be like の場合は、後続する節が実際の発話(あるいはそれに相当するもの)となっているのである。

意味的にも、引用表現 (be) like が、接続詞として機能している例(8)と極めて連続的であることが分かる。注目すべきは、以下の引用にもあるように、この引用表現が単に発話の内容を伝達するためのものではなく、その発話がなされたときの声色や態度、様子を伝達者がまねて(誇張する場合も含む)、その場の状況を再現してみせるという方法で相手に提示している点である。<sup>6</sup>

- (9) Using the new quotatives, speakers quote as if they were reproducing a real speech act but package it in a more expressive form, in sound and voice effects.  
 (Buchstaller 2002:14)

ここで、the new quotativesというのは当該の引用表現 be like のことを指している。<sup>7</sup>

また、sayタイプの伝達動詞と be like の引用表現との大まかな意味機能上の違いは以下のよう

にまとめられよう。

- (10) a. He said that he loved me.  
 b. He said, "I love you."  
 c. He said like, "I love you."
- (11) a. He was like, "I love you."  
 b. He was like a baby.

つまり、(10a)では発話の内容を伝達することになるが、(10b)では発話そのものを伝達する。それが(10c)となると、PEJDの記述にあるように、発話そのものを伝えながらもそれが厳密ではないことを示し、ほかすことになる。発話とその様式を伝達しながらも、その中心は発話にある。ところが、(11a)は発話とその時の様式を伝達しながら、その重きはその時の声色や顔の表情なども含めた様式の方にある。その様子を何かに喩えることができる場合は、(11b)のように一言（名詞句）で表現できる可能性もあろう。

このように考えれば、引用表現（be）likeが、(8a)の接続詞の用法と（そして前置詞用法の(11b)とも）極めて連続的であることが分かる。

### 3. 2. 品詞分類にばらつきがある理由

次に、問題点の(ii)なぜ辞書によってこのように品詞の分類にばらつきがあるのか、について考えてみよう。本稿ではこの原因を、引用表現の be like が現在、文法化の過程にあるからであると考える。

認知言語学における意味拡張の立場に立てば、多義語の各語義間には連続的な意味上のつながりがみとめられ、それらがネットワークをなし、各語義の境界が明確でない場合もあるのが極めて自然である。そこで、品詞などの既存の文法的な範疇に明確な線引きができない状況も起こりうる。<sup>8</sup>そしてその語義や用法が活発に変化しているさなかであれば、その品詞をどう特定するかが難しい場合が生じるのは当然であろう。当該の be like もその状況にあり、語彙的な用法（形容詞、副詞）から機能的な用法（接続詞）へと文法化の過程にあると考えられる。そのため、この引用表現におけるlikeの品詞分類にさまざまな立場が生じてしまうのである。

具体的に見てみると、(be) likeを形容詞や前置詞と分類する立場では、引用部分（節）を名詞節（名詞のかたまり）として捉え、(11a)のような用法からの意味拡張を考えるからである。その名詞節で表される発話を、そのときの様式も再現してみせて「～のようだった、こんな感じだった」と伝聞していると考えるのである。ここで、likeに後続する部分を見ると、形容詞（前置詞）の用法ではlikeの後に名詞（句）が後続し、それが引用表現として拡張して使われる場合には名詞節となっている。こうした観点からそこでのlikeの意味機能の側面を捉えようとするためである。<sup>9</sup>

また、副詞と見る立場では、引用表現とは異なる、likeの他の用法との類似性（連想）からこうした分類が生じていると考えられる。以下は副詞の例である。

- (12) a. It was like 100 degrees outside. (PEJD, sv. *like*<sup>1</sup>, 副 1.)  
 b. I mean, like, you should go. (GEJD, sv. *like*<sup>2</sup>, 副 1a)  
 c. I said like, “I love you.” (PEJD, sv. *like*<sup>1</sup>, 副 3b)

「おおよそ、だいたい、～な感じ」という副詞的な用法から、(12c)のように使われて、引用表現の be like へ拡張すると考えれば、極めて自然な連続性が見て取れる。この側面を品詞の分類に反映しようとして、(be) like を副詞の用法の1つと分類していると考えられる。

つまり、辞書によって品詞の分類にばらつきがなぜあるのかという問題については、引用表現 (be) like が、語彙的な用法 (形容詞、副詞) から機能的な用法 (接続詞) へと文法化の途上にあるからといえる。

さらに、引用表現 be like が接続詞として確立していく文法化の過程にあるということを示す根拠としては、以下の言語資料が示唆的であろう。

- (13) a. John said that he was hungry. (Haddican, *et al.* 2012:82)  
 b. \*John was like that he was hungry. (*ibid.*)  
 (14) a. Aaron said, “Shut up.”  
 b. “Shut up,” Aaron said. (*ibid.*)  
 c. “Shut up,” said Aaron. (*ibid.*)  
 (15) a. Aaron was like, “Shut up.”  
 b. \*\*“Shut up,” Aaron was like. (*ibid.*)  
 c. \*\*“Shut up,” was like Aaron. (*ibid.*)

Haddican, *et al.*(2012)が示すように、引用表現 be like は間接発話表現には用いられない(13b)。また、sayタイプの伝達動詞に見られるような、引用句が先行するような表現方法では使用できず、そこでの倒置も許されない(15b, c)。このことは、be like が、完全には引用表現として、語彙的な用法 (形容詞、副詞) から機能的な用法 (接続詞) へと確立し、成熟しきっていないことを示すと考えられる。

こうした未成熟の段階であることが、この品詞分類を統一できない大きな要因であるといえる。

#### 4. おわりに

本稿では、新たな引用表現として急速に発展しつつある be likeを取り上げ、その品詞分類が辞書によってまちまちであることを指摘した。それに対して、認知言語学的な意味拡張の観点から、この品詞を接続詞と分類すべきであることを述べた。さらに、この意味拡張の分析から、当該の引

用表現が、語彙的用法から機能的用法へと拡張する文法化の途上にあることを示し、そのことが、この品詞分類を明確にしづらくしている要因であることを論じた。

またさらに言語（使用）変化の先を考えるならば、近年報告されてきている、likeのない引用表現(16e)についても推測を与えることができるかもしれない。

- (16) a. She looked like she had a cold.  
 b. She sounded like she had a cold.  
 c. She said like, "I have a cold."  
 d. She was like, "I have a cold."  
 e. She was, "I have a cold."

引用表現 *be like* が元になっているかどうかは不明であるが、そのlikeがない引用表現「*be,*」をさらなる文法化の先と見なすこともできるかもしれない。それは、補文標識*that*からの連想である。

- (17) He said (that) it was a mean practice and that I must try not to do it any more.  
 = He said, "It was a mean practice and you must try not to do it any more."  
 (GEJD, sv. *that*<sup>2</sup>, ㊦1.)
- (18) The point is (that) you are still responsible. (PEJD, sv. *that*, ㊦1.)

引用表現 (*be*) *like* は補文標識ではないが、*say*タイプの伝達動詞の使用状況と同様の使われ方をしていくとなると、例(17)や(18)のような使用方法との連想から、*like*が省略されて使用されるようになっていき、その結果が(16d)のように現れているとも考えられる。更なる研究と時間による証明が待たれる。

#### Note

\* 本稿は、追手門学院大学長期海外研修（2015年4月～2016年3月）の研究成果に基づくものである。この貴重な機会を与えてくださった追手門学院大学、そして国際教養学部の構成員に、記して感謝申し上げたい。また、受け入れ先大学のthe University of Western Australiaにも深く感謝したい。とりわけ、Hélène Jaccopard、Meng Ji、John Henderson、Alan Dench、Marie-Eve Ritz、Celeste Rodriguez Louroには事務手続きから講義や研究会への参加、研究室での刺激的な議論等、感謝に堪えない。言わずもがな、本稿における不備や誤りに対する責任はすべて著者に帰す。

- 1 文献ではButters (1980) の指摘が最初とされる。
- 2 著者の個人的な体験 (Perth, Australia, 2015年4月～2016年3月) でも、極めて頻繁に耳にし、

特に大学キャンパス内での学生たちの会話においては、従来一般的とされている伝達動詞sayの頻度を凌ぐほどの使用状況だったと記憶する。

- 3 当然のことながら、本稿で取り扱うのは、引用表現 be like におけるlike自体の品詞分類を問題としている。
- 4 MEDFALには厳密な品詞分類は記載されていない。ただし、その代わり、以下の品詞分類に対する基準が表示してある。

*Like* can be used in the following ways:

as a preposition (followed by a noun): He looks like his father.

as a conjunction (connecting two clauses): She looked like she was about to cry.

as an adverb: I said, like, you can't do this to me.

as an adjective, especially in the phrase 'of like mind'

(MEDFAL, sv. *like*)

これにしたがえば、引用表現 (be) likeは、2つの節をつなぐ接続詞と分類されることになる。

- 5 Quirk, *et al.* (1985) は副詞的語句 (adverbial) の全体を3つに分類し、副詞的付加詞 (adjunct adverb)、離接副詞 (disjunct adverb) 連結副詞 (conjunct adverb) としている。
- 6 引用表現 be like が、実際に発話された言葉だけでなく、その時の言語化されない音 (Ughなど) や、発話者の心理状態や心の中で (起こったであろう) 発話をも伝達しうることが指摘されている (Durham, *et al.* (2012))。
- 7 Buchstaller (2002) では引用表現goも扱われている。
- 8 Alan Dench, p. c. (2015) at UWA. 具体的にはwhite (名詞、形容詞、動詞、副詞) の例。
- 9 たとえば、beforeなどが前置詞・副詞から接続詞へと拡張されて用いられていくことと同様の捉え方をしていると考えられる。

## [別表]

### 各辞書の記載事項

#### Cambridge Dictionary [CD]

adverb (Feelings/Speech)

used before you describe how you were feeling or what you said when something happened to you:

*Then I saw how late it was and I'm like, so upset.*

*He started shouting at me and I'm like, "What's your problem? I'm on your side!"*

#### Longman Dictionary of Contemporary English [LDOCE]

adv spoken

2 I'm/he's/she's like ...

a) used to tell the exact words someone used

I asked Dave if he wanted to go, and he's like, no way!

b. used to describe an event, feeling, or person, when it is difficult to describe or when you use a noise instead of words

She was like, huh? (=she did not understand)

Macmillan English Dictionary for Advanced Learner [MEDFAL]

8. used when reporting speech *spoken*

used when you are reporting what someone has said:

*And I'm like, give me a chance, Simon.*

Merriam-Webster Dictionaries [MWD]

conjunction

3. b—used interjectionally in informal speech often with the verb *be* to introduce a quotation, paraphrase, or thought expressed by or imputed to the subject of the verb, or with *it's* to report a generally held opinion

<so I'm *like*, "Give me a break"> <it's *like*, "Who cares what he thinks?">

New Oxford American Dictionary [NOAD]

adverb

2 informal used to convey a person's reported attitude or feelings in the form of direct speech (whether or not representing an actual quotation):

*so she comes into the room and she's like "Where is everybody?"*

Oxford Advanced Learner's Dictionary [OALD]

adverb

3 I'm, he's, she's, etc. *like* used in very informal speech, to mean 'I say', 'he/she says', etc.

And then I'm like 'No Way!'

Oxford Dictionary of English [ODOE]

adverb

2 informal used to convey a person's reported attitude or feelings in the form of direct speech (whether or not representing an actual quotation): *so she comes into the room and she's*



like ‘Where is everybody?’.

### 『ウィズダム英和辞典』 [WEJD]

#### 前置詞

- 4 《非標準》 b. 『be ～; 直接話法』 …という; …って感じで (“say something approximately like …”の意で, 表現しにくい出来事や感情, 実際の音などを示す時に用いることが多い; 主に若者に好まれる)

Then he was like, “You liar!”

それで彼は「うそつき」って感じで言ったんだ (≒ Then he said, …)

### 『ジーニアス英和辞典』 [GEJD]

#### 接続詞

3. [S is ~ A] a) <人が> Aと言った (1) 通例Sは代名詞, be動詞は現在形短縮形で, Aはしばしば引用符なしの引用. (2) 通例likeと引用部の間にコンマ

I asked Jim if his wife was a good cook, and he's like, oh, absolutely.

奥さんは料理が上手なのかとジムに尋ねたら、彼ったら「うん、もちろんさ」だって。

- b) (略式) [S is like, “…”; 直接引用部を導入して]…と言いたい気分 [言わんばかり] だ、…ってかんじだ、…って言うか

Jane shouted at me for no reason and I'm like, “What's your problem?”

ジェーンがわけもなくどなりつけるので、私は「どうしちゃったの？」って感じよ

Jim was like, oh no.

事務は（驚いて）「こりゃ、まいった」って言わんばかりだった。

### 『新英和中辞典』 [KNCEJD]

#### 副詞 《口・非標準的》

1. [be 動詞のあとで; 人の言葉や感情表現を引用して] 《米》 …と言う, 言うには…
- ・ And I was like, “No.” そして私は「いいや」と言った
  - ・ They were like, huh? 彼らは, 何だってと言った (彼らは驚いたようだった) .

### 『プログレッシブ英和中辞典』 [PEJD]

#### 副詞

- 3 b (引用文の前で) ((略式)) (ほかして) …とか : I said like, “I love you.” 「愛してるよ」とか言っちゃった

## 『ランダムハウス英和大辞典』 [RHEJD]

## 接続詞

3. ((話)) (…という) 感じで; (…というようなことを) 言った

・ I thought like, “Wow, you are so dumb.”

「まあ、あなたって大ばかね」というような感じがした

・ She was like, “No way am I going to do that.”

「絶対にそんなことはしないわ」みたいなことを彼女は言った.

## 『リーダーズ英和辞典』 [KEJDGR]

a (形容詞)

be like…[発話を導入して]\* 《口》(…と) 言う, 言っている.

・ And he's like, “Shut up!” そしたらあいつ「うるせえ！」って言うんだよ.

## 『ルミナス英和辞典』 [LEJD]

副詞 《略式・非標準》

2 [be 動詞の後で人のことばや感情表現を引用して]…と 言う.

・ He was like, huh? 彼は「何だって」と言った.

## 参考文献

論文・書籍:

Barbara, A. F. and J. Robles. (2010) “It’s like mmm: Enactments with it’s like.” *Discourse Studies* 12(6): 715-738.

Barbieri, F. (2009) “Quotative be like in American English-Ephemeral or here to stay?” *English World-Wide* 30(1): 68-90.

Buchstaller, Isabelle. (2002) “He goes and I’m like: The new Quotatives re-visited.” Paper presented at the University of Edinburgh Postgraduate Conference.  
www.ling.ed.ac.uk/~pgc/archive/2002/proc02/buchstaller02.pdf.

Buchstaller, Isabelle. (2013) *Quotatives: New Trends and Sociolinguistic Implications*. Wiley-Blackwell.

Buchstaller, Isabelle and A. D’Arcy. (2009) “Localized globalization: A multi-local, multivariate investigation of quotative be like.” *Journal of Sociolinguistics* 13(3): 291-331.

Butters, Ronald R. (1980) “Narrative go ‘say.’” *American Speech* 55: 304-7.

Durham, Mercedes, Bill Haddican, Eytan Zweig, Daniel Ezra Johnson, Zipporah Baker, David Cockeram, Esther Danks and Louise Tyler. 2012. “Constant linguistic effects in the diffusion

- of *be like*." *Journal of English Linguistics* 40: 316-337.
- Gibbs, Raymond W. (1994) *The Poetics of Mind*, Cambridge University Press.
- Haddican, William, Eytan Zweig, and Daniel Ezra Johnson. (2012) "The Syntax of *be like* Quotatives." *Proceedings of the 29th West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. Jaehoon Choi et al., 81-89
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*, University of Chicago Press.
- Lakoff, George, Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Concept, Image, and Symbol*, Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2000) *Grammar and Conceptualization*, Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Rodríguez Louro, Celeste. (2013). Quotatives Down Under: BE LIKE in cross-generational Australian English speech. *English World-Wide* 34(1): 48-76.
- Rodríguez Louro, Celeste. (2016). Quotatives across time: West Australian English then and now. In Heike Pichler (ed.). *Discourse-Pragmatic Variation and Change in English: New Methods and Insights*. Cambridge University Press. 139-159.
- Romaine, Suzanne and Deborah Lange. (1991) "The use of like as a marker of reported speech and thought: A case of grammaticalization in progress." *American Speech* 66: 227-279.
- Sweetser, Eve. (1990). *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge Studies in Linguistics Vol 54. Cambridge University Press.
- Tagliamonte, Sali and Alex D'Arcy. (2004) "He's like, she's like: The quotative system in Canadian youth." *Journal of Sociolinguistics* 8/4: 493-514.
- Taylor, John R. (2003) *Linguistic Categorization, 3rd Edition*, Oxford University Press.
- Traugott, Elizabeth. (1982). From Propositional to Textual to Expressive Meanings: Some Semantic-Pragmatic Aspects of grammaticalization. Winfried Lehmann and Yalov Malkiel (Eds.). *Perspectives on Historical Linguistics*. Benjamins, 245-271
- Traugott, Elizabeth (1995). Subjectification in Grammaticalization. Dieter Stein and Susan Wright (Eds.). *Subjectivity and Subjectification: Linguistic Perspectives*. Cambridge University Press.
- Vandelanotte, L. and K. Davidse. (2009) "The emergence and structure of *be like* and related quotatives: A constructional account." *Cognitive Linguistics* 20(4): 777-807.
- 小島義郎 (1999) 『英語辞書の変遷』 研究社.
- 小森道彦 (2002) 「多義語の記述とコロケーション」 『英語青年』 4月号 : 40-41.

- 白水佳子 (2012) 「発話における引用表現be like の機能について」『経営と経済』 vol.91(4): 161-172.
- 瀬戸賢一 (2000) 「多義語の記述に向けて」2000年11月. 日本英語学会第18回大会 (於甲南大学).
- 瀬戸賢一 (2007) 「メタファーと多義語の記述」楠見孝編『メタファー研究の最前線』ひつじ書房, 31-61.
- 瀬戸賢一 (2008) 「意味への回帰」『英語青年』3月号: 2-5.
- 瀬戸賢一, 山口治彦, 武田勝昭, 小森道彦 (2000) 「多義語の記述: 理論と方法」2000年11月. 日本英語学会第18回大会 (於甲南大学).
- テイラー, ジョン・R, 瀬戸賢一 (2008) 『認知文法のエッセンス』大修館.
- 深田智, 仲本康一郎 (2008) 『概念化と意味の世界 —認知意味論のアプローチ—』研究社.
- 松本曜 (2003) 『認知意味論』大修館.
- 南出康世 (1998) 『英語の辞書と辞書学』大修館.
- 南出康世 (2008) 「理想の英和辞典を求めて」『英語青年』3月号: 15-17.
- 山口治彦 (2001) 「多義を記述するために —多義構造と辞書記述のテキスト構造—」『神戸外大論叢』52.2: 62-91.
- 山梨正明 (1988) 『比喩と理解』東京大学出版会.
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』くろしお出版.

#### 辞書:

- Cambridge Dictionary*. (<http://dictionary.cambridge.org>) [CD]
- Longman Dictionary of Contemporary English*. (<http://www.ldoceonline.com>) [LDOCE]
- Macmillan English Dictionary for Advanced Learners, 2nd Edition*. 2007. Macmillan. [MEDFAL]
- Merriam-Webster Dictionaries*. (<https://www.merriam-webster.com>) [MWD]
- New Oxford American Dictionary, 2nd Edition*. 2005. Oxford University Press. [NOAD]
- Oxford Advanced Learner's Dictionary, 7th Edition*. 2005. Oxford University Press. [OALD]
- Oxford Dictionary of English* (2006) Oxford University Press. [ODOE]
- 『ウイズダム英和辞典 第3版』(2013年)三省堂. [WEJD]
- 『英語多義ネットワーク辞典』(2007年)小学館. [DOELP]
- 『ジーニアス英和辞典 第4版』(2006年)大修館. [GEJD]
- 『新英和中辞典 第7版』(2003年)研究社. [KNCEJD]
- 『プログレッシブ英和中辞典 第5版』(2012年)小学館. [PEJD]
- 『ランダムハウス英和大辞典』(1993年)小学館. [RHEJD]
- 『リーダーズ英和辞典 第3版』(2013年)研究社. [KEJDGR]
- 『ルミナス英和辞典 第2版』(2005年)研究社. [LEJD]